

第9章 菩提心を授受する (P174・9行目～P177・9行目)

2020/10/22 ozeki

おさらい

菩提心を受ける儀軌

A) 軌範師シャーンティデーヴァの流儀により菩提心を受ける儀軌

1) 加行の儀軌

- ① 供養を捧げる ② 罪を懺悔する ③ 善を随喜する ④ 法輪を転ずるよう勧請する
- ⑤ 涅槃しないよう祈願する ⑥ 善根を廻向する

2) 本行の儀軌

3) 後の儀軌

B) 主尊セルリンパの流儀により発心を受ける儀軌

1) 誓願の発心

1 加行

- ① 祈願するの
- ② 資糧を集積する
- ③ 殊勝な帰依をする

2 本行

3 後

* 本日はココを学びます

2) 発趣の律儀を受ける

主尊セルリンパの流儀により**発心**を受ける儀軌(訳注85)

聖者マイトレーヤから軌範師アサンガに伝承されてきた主尊セルリンパの流儀のようなら、
二つ、

- 1) **誓願**の発心と、
- 2) **発趣**の律儀を受ける事です。

発心 菩提心を起こすこと・思い立って何かを始めようとする事

誓願 心に願うこと。願を起こし、成し遂げようと誓うこと

発趣 holding the **vow of action** 誓い・誓願

<参考資料> * 栗飯原さん 2020/7/16 担当資料

「発願心」：菩提心をえたいと願う心 「発趣心」：そのために菩薩行に入る、と実際に行動すること

🐾おさらい 軌範師シャーンティデーヴァの流儀と主尊セルリンパの流儀の違いは？そのI

<参考資料> 解脱の宝飾 (p164) 菩提心を受ける儀軌

* 中井さん 2020/7/30 担当資料 P5・6

菩提心それを受ける儀軌は、上師・賢者たちの伝承した口訣には異なった多くの方法が見られます。そのように見られるけれども、ここには

1) 聖者マンジュシュリーから軌範師ナーガールジュナに伝承されてきた規範師シャーンティデーヴァの流儀と、

2) 聖者マイトレヤから軌範師アサンガに伝承されてきた主尊セルリンパの流儀 (訳注 2 7) との、[、合計]二つとして知るべきです。

○訳注 2 7 より引用 (解脱の宝飾 P 3 2 3)

『道灯論自註釈』(望月海慧 (『大崎学法』 1 5 5. 1 9 9 9 p 3 1) に

「ここにはまず、規範師聖ナーガールジュナと規範師聖アサンガと規範師聖シャーンティデーヴァは、誓願の菩提心を起こすことの儀軌の流儀について別異は無く一致しているし、現在の私の師・尊者吉祥ボーディバドラと、師・尊者スヴァルナディーパ (セルリンパ) たちもまたそれら聖者に従っているし、私もまたそれら師・尊者に従っているのであるから、私に対して弟子衆が誓願してから造られた儀軌のわずかな方軌の私が提示したものは、聖ナーガールジュナと聖アサンガと聖シャーンティデーバの流儀であると了解すべきです。」などという。

(中略)

セルリンパの流儀はシャーンティデーヴァの流儀とは別とされているが、彼も『入行論』に対して独特の解釈を行っており、アティシャに大きな影響を与えている。すなわち、アティシャ著『入行論の註釈』がある。またセルリンパは『入行論』の菩薩行を機根に応じて学ばせるために『入行論』の主要な偈頌を抜粋してまとめており、その二つの要略集をアティシャに伝えている。

(後略)

<参考資料> *栗飯原さん 2020/7/16 担当 解脱の宝飾 P 1 6 1

世俗の菩提心

世俗の菩提心については区別するなら、二つ、

- 1) 誓願の菩提心と
- 2) 発趣の菩提心です。

	誓願	発趣
規範師 シャーンティデーヴァの流儀	誓願は行きたいと欲するのと似ていて、[円満なる仏陀・]正等覚者[の位]を得たいとする思惟	行くことそのものと似ていて、仏陀を成就する行動である、と主張なさります。
主尊セルリンパの流儀	一切有情のために私は正等覚者を得ようといって果について誓うを受ける[・立てる]のです。	仏陀の因として六波羅蜜を学ぼうといって因について誓いを受ける[・立てる]のです。

誓願の発心

第一には三つ、

- 1) 加行と、
- 2) 本行と、
- 3) 後です。

加行 一般に、正規の修行に対する準備的に行う行のこと。

本行 仏の悟りをうるために修する本来きままっている修行。

加行

加行には三つ、

- 1) 祈願するのと、
- 2) 資糧を集積するのと、
- 3) 殊勝な帰依をします。

そのうち、第一[: 祈願すること]は、発心したい学徒[・弟子]は、定義を具えた[正規の]善知識の面前に行って礼拝すべきです。その善知識もまた、その学徒に教誡して、[弟子の]彼は輪廻に厭離を生じます。有情に悲を生じます。仏陀へ意欲を生じます。[三]法へ浄信を生じます。上師に尊敬を生じます。それから、その学徒は軌範師の後にこのように、[アティシャ著『発心と律儀の儀軌』(訳注86)に]「規範師よ、思ってください。かつての諸々の如来・阿羅漢・正等覚者・世尊と、大地に住される諸菩薩が、最初に無上の大正等覚に発心なさったのと同じく、私、名をこういう者をもまた、規範師は無上の大正等覚に発心させてください。」と、三回述べるのです。

資糧 仏道修行のかてとなる善根功德。

殊勝な帰依をします special refuge.

教誡 gives instructions 教育・教え

厭離 (えんり) renounce samsara けがれた現世を嫌い離れること

浄信を生じます develop confidence 信頼・確信

第二：資糧を集積することは、最初に上師、[三]宝に礼拝します。それから直接に準備した供養と、供養に具足したほどに知により化作したもの[・想像したもの]などを、捧げます。

それもまた、沙弥の律儀は親教師と規範師から得る。比丘の律儀は[五人以上の]僧伽から得る。二種類の菩提心は福德の資糧を集積した者から得るのである、と説かれています。そのようにまた自己に[具足した]資産が大いにあるなら、直接に小さいものでは充分ではないのです。大いに施すことが必要です。

かつて資産が大きな諸菩薩もまた、大いに施したのです。千万ほどの寺院を捧げて発心したものもあるのです。そのようにまた『賢劫経』(訳注88)に「善逝名称施は[かつて]瞻部州の王であったとき、かの月頂如来に対して、千万の寺院を捧げて、また最初に菩提に発心した。」と説かれています。

また資産が小さいなら、わずかな事物ほどを捧げたことで充分です。かつての資産が小さな諸菩薩は、わずかな事物ほどを施したのです。草一本の灯明を捧げて発心したものもあるのです。そのようにまた、『賢劫経』(訳注88)に「善逝発光は[かつて]都の乞食になったとき、かの無辺光如来に対して、草の灯明を捧げてまた最初に正覚に発心した。」と説かれています。

また資産が無いならば、粗末なものは必要ありません。三回、礼拝しただけでも充分です。かつての資産なき諸菩薩もまた、三回合掌してから発心したのものがあるのです。そのようにまた『賢劫経』(訳注89)に「如来持功德鬘は、かの具奮迅笑如来に対して、仏の礼拝、合掌を三回して、最初に正覚に発心した。」と説かれています。

第三：[差別を持った]殊勝な帰依は、上に説明したとおり、ここにすべきです。

供養に具足したほどに知により化作したもの visualize in the mind all the offerings that exist.

☆つまりどういうことでしょう。 目に見えるようにする 存在する

沙弥 仏門に入り、剃髪して十戒を受けた男子

律儀 vows 誓い 請願

親教師 受戒にあたり親しく指導してくれる師

軌範師 弟子の拠り所として和尚に代わりそれを教授すべき人物

比丘 出家得度して具足戒を受けた男子

善逝名称施 Tathagata Dawaytok 如来 真如より現れてきた者の意

善逝 (ぜんぜい) 仏の十号の一。煩惱(ぼんのう)を断って悟りの彼岸に去った者。(コトバンク)

無辺光如来

<参考資料> 浄土真宗本願寺派 光正寺 HP 「正信偈のこころ」より引用

これまでのところで、親鸞聖人は 法蔵菩薩 誓願と、法蔵菩薩が 阿弥陀如来と なられた後の 衆生救済の 活動についてお示しになりました。

つづいて、私たちがどのようにして救われていくのかという、阿弥陀如来の 光明のはたらきについて述べておられます。阿弥陀如来の 光明には、はかり知れないほど多くの徳があるのです。

ここでは、無量光、無辺光などの 十二の功德があげられています。

阿弥陀如来の 光明は、どんな人の心をも照らして下さり、また、どんなかたくなな人の心の中にも入って下さって、すべてのさまたげをのぞき、私たちが、明るい生活ができるようにして下さいます。

その光は、人間がふつうに経験する光とは異なっています。

十二光の最初は、無量光です。

無量とは、無限ということで、阿弥陀如来 光明こうみょうのはたらきは時間的に無制限であって、いつの時代の 衆生をも 救うはたらきをもっておられることをいいます。

次が無辺光です。

無辺とは、果てしがないということで、阿弥陀如来の 光明は、十方世界の すみずみまでくまなく照らすはたらきをもっておられるのです。 このように、無量光と 無辺光は、阿弥陀如来が、時間的には、過去、現在、未来の三世にわたり、空間的には、十方の あらゆる世界を照らして一切の 衆生を 完全にお救い下さる というすばらしい仏であることをあらわしています。

如来持功德鬘 Tathagata Gyi Dan

具奮迅笑如来 Tathagata Yongden Trengdan

☆「持功德鬘」「持功德鬘」は如来の名前でしょうか。

☆「資糧を集積するということ」について

資産を「施す」(布施?) ことよりも、「発心すること」に重きを置いているように読み取ったのですが、どうでしょうか。

	加行の儀軌
軌範師シャーンティーヴァの流儀	①供養を捧げる ②罪を懺悔する ③善を随喜する ④法輪を転ずるよう勧請する ⑤涅槃しないよう祈願する ⑥善根を廻向する (七支分)
主尊セルリンパの流儀	①祈願する ②資糧を集積する ③殊勝な帰依をする

七支分

<参考資料> 20208/27 野上さん担当資料・P4

本行

本行には、規範師は学徒[・弟子]にこのように教誡すべきです— 一般的に虚空界が遍満するところに、有情は遍満するのです。有情が遍満するところに、煩惱は遍満して有るのです。煩惱が遍満するところに、悪業が遍満して有るのです。悪業が遍満するところに、苦は遍満して有るのです。

苦を持つ有情彼らすべては、私の父母ばかりです。父母すべては恩ある者だけです。よって、私の恩あるこれら父母は輪廻の大海に沈み、無量の苦により圧迫され、依怙主・帰依処になる者が無く、きわめて疲弊し、悲惨です。これらの者たちが楽と会うならいい、苦を離れるならいいと、慈・悲をしばらく心に確立します。

それから、現在私はこれらの者を利益できないので、今、これらの者たちを利益するために、「正等覚者」というもの一過失すべてが尽き、功德すべてが完成し、[世の]衆生すべてを利益できるもの一それを、私は得ようといって、心に確立します。

それから、その学徒[・弟子]は規範師の後にこのように、(訳注90)「十万おられる仏陀と菩薩のすべてよ、私を思ってください。軌範師よ、私を思ってください。私の名はこういうものは、この生と他の[諸々の]生において施処成と戒処成と修所成の[副業事の]善根の、[自ら]造ったものと、[他者に]造らせたものと、造るのへ随喜したもの一それにより、かつての諸々の如来・応供・正等覚者・世尊と、大地に住する諸々の菩薩大士が、最初に無上の大正等覚に発心なさったとおり、私、名をこういうものもまた、この時から始まって、[菩提道場・]菩提の心髄にあるまでに、有情の[うち、]済度されていない者たちを済度するし、解脱していない者たちを解脱させるし、安息していない者たちを安息させるし、般涅槃してない者たちが般涅槃するために、無上の大正等覚に発心させてください。」と、三回述べることにより、受けることになるのです。

虚空界 何も妨げるものがなく、すべてのものの存在する場所。アーカーシャ (Ākāśa) の漢訳で、空または虚空界ともいう。(ウキペディア)

遍満 ゆきわたらせること

依怙(主) 依怙：頼ること。また、頼りにするもの。

施処成 the practices of generosity 寛大・寛容

戒処成 moral ethics, 道德倫理

修所成 meditation practice, 瞑想の練習

般涅槃 (引用：仏教用語の基礎知識 水野弘元 p 28)

部派仏教時代になると、涅槃には有余・無余の二種があるとされ、有余涅槃とは業報に関係した肉体という残余が存在している間の心の涅槃であり、無余涅槃とは、肉体の残余もなくなった身心すべての涅槃で、完全涅槃とされる。この考えは外教の影響を受けたもので、仏教本来のものということとはできない。しかし釈尊の肉体の死滅を無余涅槃とし、これを般涅槃（円寂、完全涅槃）といった。それが後には涅槃そのものを仏などの聖者の死滅と解するようになり、涅槃経、涅槃像、涅槃会などの涅槃は、仏の滅、死滅を意味する。

<参考資料> ガルチェン・リンポチェ法話集Ⅰ修行の道

別々の個人だと信じ込むことが幻を生みます。自分の認識や執着や嫌悪を信じ込み、これは本物、あれは偽物、などと考えます。これが心を固めてしまいます。見ることはできませんが、それは氷の塊のようになっています。釈尊は「基に二元はない。一時的に二元に現れて見えるが、それは迷乱である」と言われました。釈尊は全てを幻のようにご覧になりました。そのように見て、執着も嫌悪もすべての人に優しく接するなら、心は和らいで穏やかになります。自他にとらわれて「これは本物」、「あれは偽物」などと考えるなら、執着や嫌悪によって心は固まり、氷の塊になります。これが有情を作ります。

<参考資料> 五重の道のマハームードラの前行 P54・55 慈悲と菩提心の観修より引用

【第一 慈心の観修】

**虚空と等しき母なる有情たち すべても樂も喜び吉祥も
利他の心はもとで起こりくる いつでも慈愛の心を持つように**

このように唱えて、まず汝の恩ある母のことを思惟せよ。母には、やさしく汝を養育したなどの四つの大恩がある。続いて、その他の有情の過去生に汝の母であったときに、今生の母と同じようにやさしく汝を養育した恩を思惟せよ。最後に、一切有情がすべて樂と樂の因である慈愛の心を持つよう、作り物でない本物の願う心が生じるまで思惟せよ。

【第二 悲心の観修】

**虚空と等しき母なる有情たち 激しき六道 DUHKA の苦の因は
愚明と我執ぞ、これらが鎮まりて 利他の悲心を皆が持つことを**

このように唱えて、まず有情が激しい苦悩を体験していることに思いをいたし、彼らをあたかも自分の母であるかのごとくイメージすれば、悲心がどうしようもなく感じられるであろう。そうしてから、「あの人はこの生でのわが母ではないけれども、過去生において確かにわが母であった」と考え、最後に、「苦悩にさいなまれる一切有情で、わが母でなかったものはいない」と考えて、彼らすべてが苦と苦因である我執を離れるように、大いなる悲心を生起させるよう努力せよ

【第三 菩提心の観修】

果位での誓戒は菩提心を願うことであり、因位での誓戒は菩提心を行うことである。この願いと行いに二つの誓戒を『大発菩提心（トゥキェチャンモ）』に従って行うにせよ、あるいはより簡略な儀軌を用いるにせよ、どのように修行すべきかをよく解って行うべきである。

**私のために意欲の生涯で 畏怖や苦痛や災厄うけたれば
母らが有海を離れられるよう 菩提の優れた道に入るべし**

(後略)

果位 仏道の修行中で、まだ悟りを開くに至らない位

因位 仏道修行によって得られた悟りの位 (デジタル大辞泉)

それもまた、「有情の[うち、]済度されていない者たち」というのは、地獄・餓鬼・畜生たちです。海のような悪趣の苦を渡っていないからです。「済度する」というのは、彼らを[繁栄・]上界の道に立たせて悪趣の苦から済度するのです。天・人の位を得させるのです。

「解脱していない者たち」というのは、天と人と趣[の衆生]たちです。鉄の網のような煩惱の繫縛から解脱していないからです。「解脱させる」というのは、彼らを**至善**の道に立たせて煩惱の繫縛から解放する、解脱の位を得させるのです。

「安息してない者たち」というのは、**声聞**と**独覚**たちです。大乘において安息していないからです。「安息させる」というのは、彼らが最上の**正覚**へ発心して、大乘の**見・行**に安息する、[すなわち]十地の位を得るようするのです。

「般涅槃していない者たち」というのは、諸菩薩です。**無住涅槃**を得ていないからです。「般涅槃する」というのは、彼らを地・道に次第に立たせてから、般涅槃する、[すなわち]仏陀の位を得るようにするのです。

「ために」というのは、目的の義それらを成就せんがために、仏陀になろうと宣誓するのです。

至善 最高善 この上ない幸福

声聞 縁覚・菩薩と共に三乗のひとつ。釈尊の説法の声聞いて悟る弟子

独覚 三乗のひとつ。仏の教えによらないで自力で悟りを開き、静かに孤独を楽しんで、利他のために説法をしない聖者。縁覚。

見・行 本性を観ずること・行い

正覚 悟りを開いた人

十地の位 菩薩が修行すべき五十二の段階の41位～50位

無住涅槃 生死の迷いの世界にも、また、涅槃の境地にも、それらいずれにも留まらない涅槃の意。四涅槃のひとつ

○菩提心を培う

菩提心を上手に培うには、他者を苦から解き放つてあげようという責任感を持ち、一種の誓願を立てる必要があります。これが菩提心を起こすための必須条件です。つまり、普遍的な慈悲心を培うさいに欠かせぬ条件でもあるのです。

普遍的な菩提心を培うための主要なテクニックは二つあります。一つは「因果の七つの秘訣」、もう一つは、「自他を平等にみなし、交換する」行です。「入菩提行論」の第八章（禅定の章）には「自他を平等にみなし、交換する」行について述べられています。

「因果の七つの秘訣」

マイトレーヤ（弥勒）からアサンガ（無着）へと伝えられた菩提心を起こすための修行法

- ①一切の衆生を母と知る
- ②衆生の恩を想起する
- ③それに恩返しをしようと決意する
- ④慈しみの心をおこす
- ⑤大いなるあわれみの心をおこす
- ⑥殊勝な心がまえ、と段階を踏んで修行を重ねた果として、⑦の菩提心の境地にたどり着くことが出来る。

後

後は、大きな利が成就した[という]思惟により広大な歓喜と悦びをもまた修習させるのです。諸々の学処もまた述べるのです。そのように発心するもの彼は、「菩薩」というべきです。有情のために菩提を欲するし、菩提を得てから有情を済度したいと欲するし、菩提と有情を縁じ、彼らのために勇んで勇氣を持っていると見えるのです。（訳注91）

[以上、]誓願[すなわち]最上の菩提に発心する儀軌を、説明し終わりました。

菩提心とは道心ともいい、菩提すなわち悟りを求める心である。菩提心を起こした者は菩薩といわれ、菩薩は同時に四弘誓願などの願いを持つ。四弘誓願とは、すべての菩薩に共通して存在する四つの誓願であって、それは**衆生無辺誓願度**（衆生は無数無辺にあるから誓って彼らを救済度脱することを誓う）、**煩惱無尽誓願断**（理想をさまたげる煩惱は無限無尽にあるから、誓ってこれを断滅することを願う）、**法門無量誓願学**（仏教の教えとしての法門は無量無数であるから、誓ってこれを学ぶことを願う）、**仏道無上誓願成**（仏の悟りは無上最上のものであるから、誓って悟りを聞いて仏となることを誓う）であって、他を救済し自らを完成するための四つの願いである。

菩薩とは菩提薩埵（bodhi-satta）を簡略したものであって覚有情または開士とも訳される。菩提が覚（さとり）、薩埵(satta)が有情（衆生または含識）。つまり覚を求めている者であって、他を覚らせる者の意味も含まれるから、自覚覚他とされる。

【引用文献】 ガルチェン・リンポチェ法話集 1 修行の道 ・仏教要語の基礎知識（水野弘元）
佛教語 大 辞典（中村元）・新英和中辞典（研究社）
日本ガルチェン協会 HP 資料・五重の道のマハームードラの前行